

Title	中鉢正美が見た被爆地ヒロシマ：二つの調査記録アルバムから
Sub Title	
Author	竹村, 英樹(Takemura, Hideki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2013
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.18 (2013. 7) ,p.134- 138
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	ビューポイント 目次のタイトル：「中鉢正美が見た被爆地広島：二つの調査記録アルバムから」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20130706-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ビューポイント：

中鉢正美が見た被爆地ヒロシマ —二つの調査記録アルバムから—

竹村 英樹

はじめに

著者は浜日出夫・有末賢と共編で『被爆者調査を読む—ヒロシマ・ナガサキの継承—』（慶應義塾大学出版会）を本年 3 月に上梓した。著者は同書で「中鉢正美原爆関係資料」（以下「中鉢資料」）を利用して、中鉢が広島で行った二つの「被爆者生活史調査」を読み解く論文を執筆した（竹村 2013）。本稿はその論文で扱わなかった資料である、二つの被爆者調査を記録したフォトアルバムを取り上げる。アルバムからいくつかの写真を紹介し、中鉢が被爆地広島で何をしようとしたのか、そのファインダー越しの視線をたどってみたい。そのことを通して、中鉢による「被爆者生活史調査」が社会調査史の中で埋もれてしまった理由を探っていく。具体的には調査の成果が明確に打ち出されずに未完に終わってしまった理由の一端を明らかにしていく。

1. 「中鉢資料」と被爆者生活実態調査

「中鉢資料」は慶應義塾大学経済学部教授であった中鉢正美（1920～）が原子爆弾被爆者医療審議会委員に就任した 1965 年以降収集した原爆関係の資料をいう。中鉢が大学を定年退職した 1986 年 3 月以降、経済学部に移管され、ある期間を経て慶應義塾図書館に保管されていた。管理主体は経済学部図書委員会にあったが、実物の管理は大学図書館が行っており、図書館の倉庫に文字通り眠っていた。『被爆者調査を読む』の執筆メンバーからなる研究グループは 2009 年 6 月から 2010 年 3 月にかけて、経済学部図書委員会および大学図書館の許可を得て、断続的に閲覧をおこなった。その資料調査において、本稿で取り上げる被爆者調査を記録したフォトアルバム 2 冊を発見した。「中鉢資料」の内容については前掲書の論文（竹村 2013）に譲るが、最も価値ある資料は、1966 年 3～4 月と 1975 年 8 月に行われた「被爆者生活史調査」に関する資料である。

二つの被爆者調査とは「昭和 40 年度原子爆弾被爆者生活実態調査 生活調査・特別調査」と「昭和 50 年度原子爆弾被爆者生活実態調査 生活調査（事例調査）」である。以下、前者を「66 年事例調査」、後者を「75 年事例調査」と呼ぶ。また「66 年事例調査」の記録アルバムを「アルバム I」、「75 年事例調査」のアルバムを「アルバム II」と呼ぶこととする。「66 年事例調査」は厚生省によって実施された「昭和 40 年度原子爆弾被爆者生活実態調査」（以下「四〇年調査」）の付帯調査として行われた。「四〇年調査」は被爆後 20 年の空白を経て国が初めて実施した被

竹村英樹「ビューポイント：中鉢正美が見た被爆地広島—二つの調査記録アルバムから—」

『三田社会学』第 18 号（2013 年 7 月）134-138 頁

爆者の生活実態調査で、全国の被爆者を対象とした「基本調査」と層化抽出法による「生活調査および健康調査」からなる。これらは1965年11月に実施された。「66年事例調査」はこの「四〇年調査」の「生活調査」の付帯的調査として66年3月末から4月上旬にかけて実施された被爆者世帯を対象とした生活史調査である。また、「75年事例調査」は「66年事例調査」の追跡調査である。

2. ファインダーからみたヒロシマ

(1) 「66年事例調査」の「アルバムI」から

中鉢の被爆者調査は1965(昭和40)年3月に厚生省からの原子爆弾被爆者審議会委員の就任依頼から始まった。中鉢は「早々に現地を一見の上、諾否を決めること」^りとして、寝台列車で広島に向う。到着後、中鉢は市内の基町を訪れている。基町は「市の中央部にある太田川岸のいわゆる原爆スラムと、旧練兵趾の市営住宅を含む」地域である。「川岸には狭小なバラックが密集し、失対労務者・日雇・家内労働者・零細業主などが多く、人口流動も激しい」一方で、「市営住宅地区も、建物が老朽化し、通路や排水も悪いが、電気製品や自家用車の所有も目につき、スラムよりは常用労務者が多い」と中鉢(1968:15)が説明している。

「中鉢資料」の「アルバムI」にこの時(1965年3月7日)に中鉢が撮った写真がある。「相生橋北より市民球場方面を望む」と題された写真には、手前に大田川が流れ、背景に市民球場の照明塔と電報電話局の電波塔が聳えている、その真ん中の川岸には原爆スラムが密集している情景を写している。次の写真は「三篠橋南基町河川敷原爆スラム」と添え書きがある。「狭小なバラック」の間にある路地に数名の住人がたたずんでいるところをすこし離れた地点から撮影している。中鉢は原爆スラムに入っていく。河川敷に建てられたバラックを土手の上から見下ろすアングルで撮影した写真では、バラックと土手の間に日の当たらない水場を捉えている。中鉢は原爆スラムに被爆者生活における貧困を捉えようとしている。

原爆スラムと隣接して、市営住宅地区がある。「土手より市営住宅地区を見る。再建された広島城天守を遠望。」と添え書きのある写真は、土手の上に立つバラックを右端に近景として捉え、そのすぐ奥に市営アパートと思われる鉄筋コンクリート造の建物を中景として、さらにその先に道を挟んで瓦葺き平屋の市営住宅数棟が密集している様子を遠景として、捉えている。トタン板葺き屋根に「パーマ〇〇」と看板を掲げた木造平屋を手前に、4階建ての市営アパートを背後に捉えた写真には、「不法住宅の住人達にはアパートの入居権はない。」と添え書きをしている。木造の市営住宅が順々とコンクリートの市営アパートに建て替えられていく一方で、原爆スラムのバラックは取り残されていく。中鉢は以上のような65年の広島市基町の姿に、被爆以後20年間の被爆者生活の特徴を見いだしたのではないだろうか。中鉢の言葉でいうならば、「広島は、次第に『被爆者の町』としての性格を変え、戦後の新しい地方都市としての発展を開始した」が、「それと同時に、被爆者すなわち敗戦時の広島住民のうちにも、この発展の軌道に乗りえた人々と、被爆以前からの階層的地位や被爆による打撃等によってこの軌道に乗りえな

った人々との間の分解が深まったと想像される」²⁾。中鉢はこの「分解」を住宅に見たのであろう。木造市営住宅が取り壊されることにより、バラックと市営アパートへと「分解」している情景を写真で捉えている。

続くページは 1 年後の 1966 (昭和 41) 年 4 月になる。この「66 年事例調査」の実査期間中に撮影された写真はあまり多く残されていない。その中でも中鉢の関心事は引き続き基町にあった。横並びで二つの写真が貼り付けてあるその下に「河川敷スラム地区 - 建物が密集し、ひどく老朽化したものから、比較的新しいものまで様々。」と添え書きがある。左の写真を見ると、7 階以上はあろうと思われる高層集合住宅の前にバラックが 3 軒並んでいる。真ん中の家の前にある柵を子どもが乗り越えようとしている。この写真には「三篠橋東側の新築マンションがいかにも対称的。」とコメントが添えられている。もう一つの写真は川岸ぎりぎりに並んで建つバラックを撮った写真である。川岸は護岸工事はなされておらず、土のままである。中鉢は「川ぶちまでギリギリの処に調査対象世帯〇〇さんの家」と書いている。川沿いの軒下には洗濯物が干されている。この 1 年後にとった 66 年の写真群は、65 年時の視線と同じとってよい。敢えていえば、観察者として撮った 65 年に比して、実際の調査対象世帯の実際を目にしている点で、より個別に被爆者生活に接近しようとしている特徴がみられる。

(2) 「75 年事例調査」の「アルバム II」から

「アルバム II」は、「75 年事例調査」を記録した写真が主に収められている。ここに写された写真は、「アルバム I」が白黒写真であることに対照的に、すべてカラー写真である。1975 年 8 月 24 日と書かれたページから多くの写真が撮影されているのは、「基町河川敷住宅の撤去作業」と題された写真群である。河川沿いにある木造平屋にはまだ人が住んでおり、軒下に洗濯物が干されている。掃き出し窓(戸)は開け放たれていて、洗濯物の下に子どもらしき人影がみえる。その子どもも見て先は、隣家がすべて撤去されて、ブルドーザーで地面をならした筋がついた空き地になっている。この家も近いうちに取り壊しになることを想像させる。この背景に写っているのは真ん中に太田川を挟んで、コンクリートで整備された対岸の河岸であり、それに沿って高層マンションが聳えている。

1965 年に初めて基町を訪れた時の写真では、「発展の軌道に乗り遅れた」被爆者生活を捉えることにリアリティがあった。そのリアリティに「1966 年事例調査」の問題意識があった。10 年後の 1975 年には、このリアリティがなくなりつつあることをファイナダー越しに捉えているように思える。別の写真では、取り壊し中の河川敷住宅を写している。柱と屋根だけを残し、襖や建具はすべて取りさらわれ、部屋には赤い敷布団と毛布と小さな家財が置き捨てられている。背景に小さく対岸のビルが写っている。これらに続いて、「基町住宅新旧」あるいは「新旧住宅様々」と題された写真群がある。これらは土手の上から太田川を背に撮影した風景で、土手の緑を手前にその先に木造平屋住居とすぐ隣に 4~5 階建てのアパートが並んでいる。アパートの陰の遠景に建築中の高層アパートの鉄骨が見える。さらに別の写真では、前景

に木造平屋住宅が密集して並び、中景に低層アパート、遠景に高層アパートを写している。

ページをめくると、中鉢は基町を後に川沿いに北へ進み、白島町に入っているのが分る。白島町は「市の北部にある大企業職員、公務員など中流階級の典型的な住宅地区であり、「大企業工員の社宅や公務員住宅なども散在する」（中鉢 1968:16）の調査対象地区である。「北大橋より南望」と題された写真がある。河川敷は整備され遊歩道になっており、太田川岸の左側（東側）には高層アパートが聳えている。さらに「県営長寿園アパート 住宅供給公社」と添え書きされた高層アパートの写真が数枚続く。「白島北町から西白島方面眺望」と題された写真にも、高層アパートを背景に手前に一戸建ての家屋が写っているが、その家屋は「中流階級の典型的な住宅地区」にふさわしい様子である。「白島中町辺」と題された写真にある住宅は「建物は敷地を十分にとっており、環境は良好である」という表現そのままである（中鉢 1968:16）。ここには基町にかろうじて見られた被爆者生活間の「分解」は見ることができない。この後、アルバムは他の調査対象地区の様子を捉えた写真が続き、対象世帯への個別的な関心を示している³⁾。

むすびにかえて

中鉢が調査記録アルバムを残し、また、「中鉢資料」が公的に保存されていたゆえに、「被爆者生活史調査」を再発見することができた。「66年事例調査」の報告書が論文（中鉢 1968）として残されている一方で、「75年事例調査」は公式報告書に比較的短い論文（中鉢 1977）が残されているのみである。「75年事例調査」が調査単体として結論を明確に打ち出すことがなかった理由の一つは、個別には見えている被爆者世帯における生活（史）上の困難が、社会的なまとまりをもって、すなわち社会階層として、把握しにくくなっていたことがある。このことを二つのアルバムから傍証した。

「中鉢資料」は我々の研究グループの閲覧が終った後、慶應義塾図書館に配架された書籍等を除き、2010年3月末に広島大学平和科学研究センターに寄贈・移管されている。「中鉢資料」の詳細について本稿で示すことはできなかった。この貴重な調査資料が存在していること、そして、現在は三田には存在しないことを書いて、小稿を終える。

【註】

- 1) 中鉢による「アルバムⅠ」の添え書きから。以下、注記がなければ、「Ⅰ」は「アルバムⅠ」および「Ⅱ」からの引用である。
- 2) 中鉢正美, 1968, 「被爆者生活の構造的特質」p. 13。この記述は「広島地域社会の壊滅から復興にいたる過程を、被爆者の世帯再構成、前住地復帰、経済的安定等の関連において時期区分」した1950年から54年末までを表現した記述である。このような状況が基町に残存していたのであろう。
- 3) 個人情報を含むため詳細を記せないが、「75年事例調査」の成果として中鉢が残した生活史作品である未公表原稿「広島のある町、その被爆三〇年」（1975年）の舞台となった町の写真が掲載されている。

【参考文献】

- 中鉢正美.1968.「被爆者生活の構造的特質—広島地域における面接調査を中心として—」『三田学会雑誌』
61 卷 12 号:1-28.
- 中鉢正美.1977.「事例調査報告—広島市の部—」厚生省公衆衛生局企画課.1977.『昭和 50 年原子爆弾被爆
者実態調査 (事例調査)』:1-6.
- 浜日出夫・有末賢・竹村英樹編.2013.『被爆者調査を読む—ヒロシマ・ナガサキの継承—』慶應義塾大学
出版会.
- 竹村英樹.2013.「中鉢正美『生活構造論』の展開と二つの『被爆者生活史調査』」浜・有末・竹村編『被爆
者調査を読む』第 2 章:35-76.

(たけむら ひでき 慶應義塾大学教職課程センター)